

---

# ホワイトクリスマス      それは戦争

小石 汐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホワイトクリスマス      それは戦争

### 【Nコード】

N7886Z

### 【作者名】

小石 汐

### 【あらすじ】

時は世紀末ではなく、ただの年末。クリスマスですね。これはホワイトクリスマスにおける戦争の話。ちょっと大人しめの女の子、そして好きな子に意地悪したくなるような男の子が繰り広げる、ちよつとしょっぱくて甘いストーリーです。ノノああ、僕はただしょっぱえだけだった。しょっぱえお……スケジュールが更に詰まった。

ホワイトクリスマスと言えば、粉雪の降り注ぐ聖なる夜を想像すると思う。

はらはらと舞い落ちる粉雪を見上げ、吐く息が白くなるほどの寒空の下、静かに相手を待つ。

町の喧騒が身に沁みて、自分一人だけが取り残されたかのような錯覚に陥った。

本当に相手は来るのだろうか　そんな心配が、舞う雪のように服の隙間から滑り込んでくる頃、相手が息を切らせながら走ってくる。

それを見て、私の口元は自然に弛んだ。

……みたいなのが、数年前までのクリスマスだった。  
いや、まあ、実際にそんな経験したわけじゃないんだけどね。  
妄想ぐらい自由だと思うんだ。

ツイッターに『ぼっちなう！』って呟いて、他のぼっちと徒党を組み、ボッチーズと言うイヴと当日と限定の集団を作り上げ、タイムラインを支配する　リア充どもは、タイムラインに現れる余裕も無いぐらい忙しいと思うから、実際のところ誰にも迷惑かけてないし良いよね。

毎年、同じように家族とクリスマスを過ごしていたんだけど、もう五年ほど前になるのだろうか　私が高校を卒業する年のことだった。母が私にこう言ったのだ。

「……あんた、今年も独り身なんやね」

訝るような母の視線に、私は血を吐いた。精神的な比喩表現ではなく、実際に血を吐いた。舌を盛大に噛んだのだ。

母の証言によると、その後、私はただだと血を流しながら、虚ろな目をして、そのまま自室に戻ったらしい。

覚えているのは、濡れた枕の冷たさだけだった。

と言うわけで、私はその年の春に家を出た。

仕事を探して、一人暮らしをして、もう誰にも一人ぼっちのクリスマスを邪魔させないために。

これからもボッチーズの一員として、タイムラインを支配するために！

……しかし、全ては変わってしまった。本当にワケの分からない状況になりつつあった。

十二月二十五日、午前零時にセットしておいたアラームがけたたましく鳴り響いた。

それを止めて、私は一瞬で身を起こす。そして、周囲の気配を伺った。

音はない。零時だ、深夜なのだ、当然だ。

しかし、油断はならない。私はそろりと足音を消しながら、ワームに唯一ある窓を開け、ベランダに出た。

空気は洒落にならないほど冷たい。下手をすると心臓マヒで死ぬぐらいには寒い。

そして、今年のクリスマスも雪が降り始めていた。これは荒れるな。私は雲が立ち込める夜空を見上げて、白い息を吐いた。

身体が冷えるので、私はすぐに部屋に戻った。

そして、灯りもつけず、静かにクリスマスの準備を始めた。

ホワイトクリスマス。それは戦争だ。

朝七時、私は仕事場に向かうために、家を出る。化粧はしていない。万が一に備えてだ。

数年前から、クリスマスに化粧をする女性は少なくなってきた。何故なのか　簡単なことだ、一瞬にして無に帰すからだ。玄関に近寄って、外の気配を確認する。嬉しそうやら、楽しそうやら、怒ってそうだったり、また悲しんでそうな色々な叫びが僅かに聞き取れた。

しかし、すぐ近くに人の気配はない。私はそつと部屋を出ようとした。

刹那、目の前に広がったのは白だった。

そして、それを顔でモロに受け止める。息が詰まり、私は被弾したことを理解する。あれほど警戒していたのに……！　どうやら敵は息を潜めて、私を待ち受けていたようだ。

私は顔にべっとりついた生クリームを袖で拭い、まずは酸素を吸い込む。口に入ったクリームは、とても甘かった。砂糖入れすぎだ。

「はっは、そろそろ学習しようよ、先輩。ホワイトクリスマス！」

既に生クリームで全身真っ白になっている男が嬉々として、去っていった。

私は悔しかった。甘いはずのクリームが少ししょっぱく感じた。

何でこんなことになったのだろうか　それは恐ろしい発想だった。

スペインで行われているトマト祭りをご存知だろうか？

少し前にテレビで取り上げられて、知っている方も多いと思うのだけれど、若者のテレビ離れが深刻だとか、よく分からない統計が出回っている今日、何を信賴すれば……いや、それは関係ない。

閑話休題。

本名はラ・トマティーナ。そして別名と言うか、日本ではトマト

祭りとして紹介された、このお祭りは完熟トマトの投げ合いを行う。実際は色々順番があつて、トマトの投げ合いが始まるのだけれど、関係ないから省略。

完熟なので、ぶつかつたトマトは潰れて、人はトマト塗れになる。実際は当たった人が怪我しないように、あらかじめ少し潰してから投げなければならぬのだけれど、それも関係ないので略。

そして、町中でトマトの湖が出来るほど、激しい祭りなのだ。

それを日本で行うと、こんな感じになつた。

ホワイトクリスマス 生クリーム合戦だ。

こんなこと、どこか馬鹿が考えたんだとツツコミたくなるけれど、リア充も非リア充も皆、楽しめる合理的なお祭りだと言われ、今年で三回目になる。

祭りが始まつた当初、非リア充が徒党を組んで、リア充カップルを狙うこともあつた。

当然のことだろう 合法的にリア充を爆発……とまではいかなくても、直接的に憂さを晴らすことができるのだから。

しかし、とあるカップルが顔についたクリームを舐めあっているのを見て、非リア充の徒党は、リア充カップルを狙わなくなつた。悲壮感が倍増しになつたのだ。

そんな光景を横目に見ながら、私は職場へと向かう。家で涙とクリームをさつと落として、再び家を出たのだ。

化粧をしなかつた理由は、ここに尽きる。化粧しても無駄だと言つた意味を、ご理解していただけたことだろう。

私は、あの馬鹿男の再来を警戒しながら足を進める。それからは何事もなく、仕事場に着くことができた。

「ホワイトオオクリスマスアアアッス！」

仕事場の更衣室に入った途端、男の声がした。ここは女子更衣室だとか、色々ツツコミたいことはあつたけれど、今はさておく。咄嗟に振り返りそうになるのを堪えて、その場にしゃがみこんだ。頭のすぐ上を白い物体が通過していくのが見えた。

「な、に……!？」

男の顔が驚愕に染まる。一度、全身の生クリームを洗い流したのか、目を丸くしているのが分かった。

「そう何度も同じ手を食うかつ!」

鞆に仕込んでおいた生クリームの袋を取り出して、私は男に向けた。そして強く絞って噴射した。

よくよく考える。ここ職場。掃除大変。上司怒る。オワタ。

しかし、今はそんなことは関係ない。私の噴射したクリームを男は手で受け止めた。完全にヒットしなかったことに、私は自然と舌打ちが漏れた。

「ふーん……いいんですか、先輩。僕に武器を与えて?」

何　と私が反応する前に、彼は動いた。クリームを受けた手が、私に迫る。

「ヤイニングフィンガー!」

「にゃあああああああ!!」

本日二戦二敗、今年も完敗しそうだった。

「課長ーあの　ぶふっ!」

「やーい、引っかつたー」

仕事の発注で分らないことがあり、私は課長のデスクを訪れた……　だけなのに、この始末だ。

私は資料を課長に叩きつけて、そのままトイレへと向かう。このまま自らのデスクには戻れなかった。生クリームがぼとぼと落ちてゆく中では、資料すらまともに扱えない。と言うか、既にクリーム塗れで、資料の大半がお亡くなりになっていた。

彼らは分かっているのだろうか……　今日はクリーム合戦が許される。しかし、明日からは、また普通に仕事をこなさなければならぬのだ。ここで死んだ資料は、ゾンビのように私たちに付き纏う

そうノルマとなつて。

冷たい水で顔を洗うと、熱くなりつつあつた私の心も少し落ち着いて。できるかぎり資料を、守らないと　仕事を進めるのではなく、今出来上がっている仕事を如何に守り抜くかと考え始めていた、その時だつた。

「ばちこん、と私の顔を衝撃が襲い、息が詰まる。油断していた。両肩がぶるぶると震えてくる。男の能天気な声が、私の怒りを助長する。」

「先輩、ほんとと、無警戒つすねー」  
けられらと笑う男に背を向けて、私は再びトイレに戻つた。男である彼が、女子トイレに踏み込んでくることはなかった。

何とか資料を守り抜いた私は終業の時間を迎え、足早にオフィスを抜ける。

上司ですら、あの調子だったので、私は掃除せずに帰つた。やってられん、と一人呟きながら帰っていると、見知らぬ顔にクリームをぶつけられた。

私は無反応で、その場を去つた。泣きたい。

何で私ばかり　ってのは、ただの思い込み。きっと誰もがぶつけられ、そしてぶつけ返し、この日を楽しんでいるのだらう。

しかし、私には無理だ。そうやって楽しめる性格だったら、今頃彼氏の一人ぐらいいはいたはずだ、と思う……思いたい。

視界が歪む。涙のせいだ。私はクリームを拭うふりをして、目じりをこすつた。

「……ッ、痛」

目にクリームが入つた。何で私ばかり……私だけではないことを理解しているのに、その言葉は自然と零れ出た。

「大丈夫っすか、先輩？」



声に顔を上げると、朝からずっと私を襲い続けていた彼が立っていた。恐らく、帰り道でも襲うつもりだったのだろう。彼は生クリームを塗りたくったケーキを手に使っていた。去年も、そうだった。「大丈夫」

そつと彼の横を通り過ぎて、私は帰路を急ぐ。

「なら、遠慮なく」

彼は私の後頭部にケーキを叩き込んだ。私は無視する。逃げるように、自然と早足になった。

「あれ、先輩、怒らないんすか？」

私は答えない。

「せんぱーい、そんなだから皆、近寄らないんすよー」

あんたは鬱陶しいぐらい近寄ってくるじゃないの　ただ、それは言葉にならなかった。

「知ってます？　先輩、鉄仮面女って呼ばれてるの」

知ってる。そんなの随分と昔から知っている。

人前で上手く笑えたり、お世辞言えたりと、人並みの社交性があったら、今の私みたいになってないから。

「ねーえ、先輩！」

彼はついに、私の前を遮った。

いつも通り無表情を向けるも、見たことのない彼の真剣な表情に、私は思わず息を飲んだ。

「怒ってるっすよね？」

「……怒ってない」

「いや、違う。むしろ、怒れよ」

彼は私の両肩を掴んだ。

はつとして、私は彼の顔を見つめる。

いつもの軽い彼では無かった。

真剣な眼差しが私を貫く。

私ではなく、むしろ彼の方が怒っているように見えた。

「いっつも、そうっすよね。先輩は自分の感情を押し殺して生きて

ますよね。そんなんで大丈夫なんすか？ いや、大丈夫なワケないっすよね。現に泣いてるし」

彼の指が、私の目じりについたクリームを涙と一緒に拭いた。指はざらついでいて、力強くて、少し痛かった。

やがて、彼は目を伏せ、小さく呟く。

「……心配なんすよ。先輩、いつも笑わないし、理不尽なことがあっても怒らない。それに昼飯だって、いつも一人だし、色気無いぶふう」

余計なお世話、と私は鞆に残っていたクリームを彼の顔に噴射した。

彼はそれを必死に拭い、目を丸くしていた。

「余計なお世話だし」

「だったら、何で泣いてんすか？」

もはや、私の目から洪水のように流れ落ちる涙は止まらなくなっていた。拭っても拭っても、それは止まらない。まるで、目の前の彼に鉄仮面を叩き割られたかのようなだった。

「別にいい、分かったことだし……お世辞言えないし、笑えない……人付き合い上手くないことなんて分かってる。私には仕事しかない。ただ、ひたすら仕事をこなしていく以外に、認められる術はない。これが、嫌われ者の小さな足掻き」

私は割れた鉄仮面を、必死に両手でかき集める。それを被りなおして、彼を見た。

「気遣いはありがたいけど、もう無理して私に構わなくていいから」「無理してねえっす、僕は好きで先輩に構っていますから」

は、と私は思わず声を漏らす。彼は彼で、慌てふためきながら何か言葉を探しているようだった。私も何と云えばいいのか分からず、混乱する。

告白ではないと思う。たぶん、言葉を間違えただけだろう。

やがて、彼は急に真顔になって、私を見つめる。

「真面目だけど不器用で、いっつも気を遣って、僕らに怒ることも

できず、無表情で文句一つ漏らさずに仕事のフォローをしてくれる、そんな優しすぎる先輩が好きなんす」

そんな、まさかと私は息を飲む。

返す言葉が見つからなかった。そんな私に、彼は続けて言う。

「いいんすよ、先輩。気にしなくて、僕にはちゃんと言ってください。もっと、先輩の役に立てるようになりたいですから。いつまでも足を引つ張りたくないですから」

「……そんなこと言ったら、あんたの心が折れるまで、言い尽くしちゃうかもよ？」

実際、彼の仕事は酷い。ただ、それは私自身が嫌われることを恐れて、ちゃんとした指導を与えていない結果なのだろう。彼が成長しないのも当然のことなのだ。それら全てを理解して、背負い続けるつもりだった。

しかし、彼は自分の荷物は自分で持つと、私の重荷を一つ奪っていった。

「構わないっす。たぶん、折れねえっすから。先輩にとって、僕が特別な存在なんだって、実感できる瞬間になるんですから」

その瞬間、横合いからクリームが投げつけられた。私も彼も目を丸くして、見つめ合った。そして、ゆっくりとクリームを拭う。「リア充爆発しろ！」と叫んでゆく集団が去っていった。私はその後姿を呆然と見送った。

勘違い　そう口を開こうとして、私は止めた。

代わりに、開いた口から舌を伸ばし、彼の頬についたクリームを舐める。

彼は今までにないぐらい目をまん丸にして、私を見つめていた。砂糖入れすぎだ　私は無表情で呟く。口の中に残るクリームは、とても甘かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7886z/>

---

ホワイトクリスマス      それは戦争

2011年12月25日13時49分発行